

St. Luke's International University Repository

Concept of Nursing Subject and Nursing Practice in the First-year Nursing Students.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 道子, 香春, 知永, 横山, 美樹, 岩田, 多加子, 大久保, 暉子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/390

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



入学当初の看護学生の考える看護の「対象」と「方法」

－学部生群と学士編入生群－

小澤 道子¹⁾

香春 知永²⁾

横山 美樹³⁾

岩田多加子⁴⁾

大久保暢子⁴⁾

要 旨

本調査は、「看護学」の出発点において学部生群と学士編入生群がどのように看護の「対象」と「方法」を考えているのかを知ることを目的とした。

対象は、S 看護大学に1997年度と1999年度の入学生169名（学部生132人・学士編入生37人）であり、4月の初回講義時に質問紙法を用いて現在の健康状態・生活の満足・元気観・健康観、そして看護観は「今、あなたが考える看護とは何でしょう」の設問で自由記述を求めその内容を分析した。

その結果、①看護の「対象」は病気をもった人や病気や怪我をもって苦しんでいる人に代表される病気を中心とする者が7割以上を占めていること、②看護の「方法」は、記述の中の動詞に着目すると81種類に分けられ、使用頻度の高い動詞は「ケアする」「サポートする」「(必要なことを)～する」「援助する」「～してあげる」「手助けする」などであったこと、そして、これらの動詞の目的語を検討するとさまざまであり、同じ動詞の表現であっても意味する内容は多様であることも示唆された。また、学部生群と学士編入生群は、看護の「対象」に関しては類似していたが、看護の「方法」については学士編入生群の方が1人当たりの動詞の数が多く、動詞の意味するものに技術的なことや知識への期待がこめられているとも解釈できる結果であった。

今後、看護教育を受ける中で看護の対象と方法がどのように変化していくかが次への追究課題である。

キーワーズ

看護学生、看護の対象、看護の方法、入学当初

I. はじめに

「看護とは何であるか」という問いとその答えである看護観は、看護学を専攻するものにとって、問い合わせられるべき命題であり、個人の活動の羅針盤のひとつであろう。

看護学を専攻する出発点である入学したばかりの看護学生は、どのように看護をとらえているのか、そしてそのとらえ方がその後の看護観の発達とどのように関係しているかは興味あるテーマである。

本調査の新入学生は、現行の高校卒業後に入学する学生（以下学部生）と平成9年度より導入された学士編入

制度で第2学年に編入学する学士編入生（以下学士生）である。学士編入制度の長所は、「幅広い教養教育を修得し、人間的にもある程度成熟した段階で進路を決定できること、多様な学習経験を有するものが混じり合う中の医療人を育成できること」（21世紀の医学医療懇談会第1次報告1996）とされ、その導入が推奨されている。これらの新入学生をアイデンティティの発達からみると、学部生は自己アイデンティティの発達途上に進路選択を決定した群であり、一方、学士生は人生後半に向けて自己アイデンティティの問い合わせや再構成をしながら進路選択をした群とも特性づけられる。

そこで本報告は、人間を直接対象とする「看護学」の出発点において学部生群と学士生群がどのように看護の「対象」と「方法」を考えているのかを知ることを目的とした。このことは、価値の多様化の中で進路選択から見た看護基礎教育のありように資するものでもある。

1) 聖路加看護大学 教授（基礎看護学）

2) 聖路加看護大学 助教授（基礎看護学）

3) 聖路加看護大学 講師（基礎看護学）

4) 聖路加看護大学 助手（基礎看護学）

表1 対象者

	学部生	学士生
人 数	132	37
平均年齢	18.9±3.5 (18~46)	26.2±6.4 (22~52)

表2 対象者の現在の生活

	学部生群 n=131	学士生群 n=35	計 n=166
自覚的健康状態			
非常に健康	31(23.7)	13(37.1)	44(26.5)%
まあ健康	95(72.5)	22(62.9)	117(70.5)
あまり健康でない	5(3.8)	0	5(3.0)
健康でない	0	0	0
生活の満足			
満足	48(36.3)	14(38.9)	62(36.9)%
やや満足	64(48.5)	19(52.7)	83(49.4)
やや不満足	19(14.4)	2(5.6)	21(12.5)
不満足	1(0.8)	1(2.8)	2(1.2)

II. 対象と方法

対象は、S看護大学1997年度と1999年度入学生計169人である。このうち132人は学部1年生であり、37人は2年次学生となる学士編入生である。

方法は、質問紙法をとり、1997年と1999年の4月の初回講義時に調査の趣旨と成績評価や個人的なことを問題にしないことを伝え教室内で実施した。回収は全員からであった。質問紙の構成は、現在の健康状態・生活の満足、注意している健康行動の有無、自由記述を求めた健康観・元気観・看護観、対象者の属性などである。今回は、看護観の問い合わせ、「今、あなたが考える看護とは何でしょう」という設問に、縦10.3cmと横16.4cmの枠を設け自由記述を求め、その記述内容を分析した。分析の手続きは、記述の中から看護の「対象」と「方法」についての内容を抽出し、さらにそれらの記述表現を意味のとれる最少単位でラベル化して量的に検討した。

III. 結 果

1. 対象者について

1) 対象者の背景

学部生群の平均年齢は、18.9±3.5 (18~46) 歳、一方学士生群は、26.2±6.4 (22~52) 歳であった（表1）。学部生群は、18~19歳 (71.2%)、20~22歳 (11.3%) が全体の8割以上を示すのに対し、学士生群は24~29歳 (48.6%)、30歳以上 (13.5%) が全体の6割を示していた。なお両群とも同胞数、住居状況は類似していた。

表3 看護の対象についての上位項目 n=154

順位	項目	件数	出現率%
1	病気の人・病にかかっている・病気を持っている	49	31.8
2	患者・患者さん	48	31.1
3	人・人間・他人	26	16.8
4	肉体的・精神的に病んでいる人	16	10.3
	日常生活動作が自分でできない人	16	10.3
6	患者さんの家族	15	9.7
7	不安・悩みを抱えている人・不快な状態	13	8.4
8	助け・看護を必要としている人	10	6.5
9	苦しんでいる人（病気など）	8	5.2
	怪我のある人・傷を負った人	8	5.2
	健康でない人	8	5.2
	健康な状態である人	8	5.2

1人平均件数：1.7件

2) 現在の生活の満足と自覚的健康状態

主観的な指標としての現在の生活の満足を「満足」から「不満足」の4段階、また自覚的健康状態を「非常に健康」から「健康でない」の4段階で求めると、両群とも約9割が現在の生活に満足し、自分の健康状態は健康であると答えていた（表2）。

2. 看護の「対象」

「今、あなたが考える看護とは何でしょう」という設問の自由記述は、全員が回答し、大多数は文章の形態であるが、ごく少数に箇条書き列挙の形態であった。

1) 看護の対象の記述の有無

自由記述の中で看護の対象の記述と読み取れるものは、154人 (91.1%) で、学部生群120/132 (90.9%)、学士生群34/37 (91.9%) であった。記述表現を意味のとれる最小単位としたラベル総件数は、268件で1人当たり平均1.7件であった。学部生群の平均ラベル件数1.6件、学士生群1.8件であり、両群の平均ラベル件数は類似していた。

2) 看護の対象の記述表現

ラベルを記述表現ごとにまとめると、34通りに分けられた。それらの記述者総数に対する出現率を算出すると、第1位「病気の人・病にかかっている・病気を持っている」(31.8%)、ついで「患者・患者さん」(31.1%)、「人・人間・他人」(16.8%)などであった（表3）。学部生群と学士生群別に同様な方法で対象の出現率を比較すると、第1位から第3位までは、ほぼ類似した対象であるが、「人・人間・他人」については、学部生群15人 (12.5%)、学士生群11人 (32.4%) であった（表4）。

表4 看護の対象についての上位項目－学部生群・学士生群－

順位	学 部 生 群 n=120		学 士 生 群 n=34	
	項 目	件数(%)	項 目	件数(%)
1	病気の人・病にかかっている・病気を持っている	39(32.5)	人・人間・他人	11(32.4)
2	患者・患者さん	38(31.7)	病気の人・病にかかっている・病気を持っている	10(29.4)
3	人・人間・他人	15(12.5)	患者・患者さん	10(29.4)
4	肉体的・精神的に病んでいる人	15(12.5)	日常生活動作が自分でできない人	4(11.8)
5	日常生活動作が自分でできない人	12(10.0)	患者さんの家族	3(8.8)
6	患者さんの家族	12(10.0)	健康な状態である人	3 (8.8)
7	不安・悩みを抱えている人・不快な状態	12(10.0)	孤独な人・社会から取り残された人	3(8.8)
8	助け・看護を必要としている人	8(6.7)	助け・看護を必要としている人	2(5.8)
9	怪我のある人・傷を負った人	8(6.7)	苦しんでいる人(病気など)	2(5.8)
10	健康でない人	7(5.8)	周りの人・身近な人	2(5.8)

1人平均件数：学部生1.6件、学士生1.8件

両群の出現率もほぼ類似していた。

3) 「生・老・病・死」別にみた看護の対象

看護は、人間の健康現象を扱っている学問ということから、対象の記述表現ラベルを「生・老・病・死」別に分類した。その結果、「病」に関するラベルは総ラベル数の約7割を占め、次いで「生」19.4%、「死」1.5%、「老」0.4%，そして残り「その他」7.1%であった（表5）。

全体の7割以上を占める「病」に関する内容は、「病気の人」・「患者」・「肉体的・精神的に病んでいる人」・「不安・悩みを抱えている人」・「健康でない人」・「怪我のある人」・「病院に通う人」・「障害を抱えている人」など16通りに分けられた。次いで約2割を占めていたのは、「人・人間・他人」・「健康な状態である人」・「困っている人」・「社会の中で弱い立場にある個人」など「生」に関する11通りであった。「死」は「助からない人・人生の終末を迎える人・癌において先が予想できない人」の4件であり、「老」は、老人という記述1件のみであった。

3. 看護の「方法」

ここでいう「方法」は、看護実践と同義語として使用している。すなわち、新入学生は、看護の対象に何を行い、どのような方法を考えているかを知るため、看護実践に関する記述を抽出した。今回は、その抽出したラベルの中の動詞を中心に分析を行った。

1) 看護の「方法」の記述の有無とラベル件数

「方法」のラベルの中で動詞の記述が有る者は、159人(94.0%)であった。そして動詞の記述総件数は643件であり、1人平均4.0件であった。学部生群の平均は

3.7件、学士群は5.4件であった($p<0.01$)。

2) 「方法」の動詞表現とその種類

動詞の記述表現別にラベルを分類すると81種類に分かれ、それらの総ラベル数に対する出現割合を算出した（表6）。その結果、第1位は、「ケアする」(35.8%)、ついで「サポート」(27.7%)、「(必要なことを)～する」(26.4%)、「援助する」(25.2%)、「～してあげる」(24.5%)、「手助けする」(22.6%)、「手伝う」(21.4%)、「支える」(20.4%)の順であった。なお、出現割合が5%以下の動詞の種類は、62種類とさまざまであった。学部生群と学士生群の両群間の比較を各群の第1位から10位までの動詞表現で検討すると、ほぼ内容的には類似していた（表7）。しかし、出現割合は、学部生群の第1位「ケアする」が31.2%であるのに対し、学士生群の第1位「援助する」70.6%，第2位「ケアする」52.9%，第3位「技術を使う」35.3%と、学士生群のほうが全体に出現割合が高かった。また、学部生群の第4位の「～してあげる」27.2%は、学士群では14.7%，また学士群の第4位の「世話する」26.5%は学部生群では8.0%であった。

3) 動詞表現とその内容

動詞の意味する内容を知るために、動詞の目的語について検討をした。ここでは上位の動詞である「ケアする」・「サポートする」・「援助する」の意味する内容について示す。

① 「ケアする」ことの内容

「ケアする」ことの意味する内容は、精神的(心)なケア(36.8%)、身体的(肉体的)ケア(19.2%)、身体(肉体)と精神(心)のケア(17.5%)の順で、これら3つで7割以上を占めていた（表8）。学部生群と学士

表5 看護の対象－生・老・病・死－

	項目	件数(%)
生	人・人間・他人 健康な状態である人 周りの人・身近な人 孤独な人・社会から取り残された人 困っている人 友人 自分 患者が健康であるか否かは別 一生懸命生きようとする人 不自由を強いられている個人 社会の中で弱い立場にある個人	(26) 52(19.4) (8) (5) (3) (2) (2) (2) (1) (1) (1) (1)
老	老人	(1) 1(0.4)
病	病気の人・病にかかっている・ 病気を持っている 患者・患者さん 肉体的・精神的に病んでいる人 日常生活動作が自分でできない人 不安・悩みを抱えている人・ 不快な状態 助け・看護を必要としている人 苦しんでいる人（病気など） 怪我のある人・傷を負った人 健康でない人 治ろうとする人・健康を求める人 病院へ通う人・入院した人 障害を抱えた人 寝たきりの人 病院へ通わない病んだ人々 体への治療だけでは不完全な患者 急性期の方	(49) 192(71.6) (48) (16) (16) (13) (10) (8) (8) (8) (5) (3) (3) (2) (1) (1)
死	助からない人・人生の終末を迎える人 癌において先が予想できない人	(3) 4(1.5) (1)
他	患者さんの家族 社会 看護をする相手が主役 医師	(15) 19(7.1) (2) (1) (1)
	計	268(100.0)

表6 看護の方法－動詞の出現割合－

出現割合	内 容	n=159
30%～	ケアする	
25%～	サポート, (必要なことを) ~する, 援助する	
20%～	~してあげる, 手助けする, 手伝う, 支える	
15%～	(技術を) 使う, 考える	
10%～	世話する, 見守る	
5%～	助ける, 努める, 接する, 理解する, 判断する, (近くに) いる, 側にいる	
～ 5%	(環境を) つくる, 取り除く, 補助する, (相手の立場に) なる, 共有する, 介護する, 提供する, 配慮する, 感じとる, (手を) 貸す, 対応する, 尊敬する, (手を) さしのべる, (痛みなどを) 和らげる, 維持する, 保つ, 寄り添う, (一緒に) いる, (言葉を) かける, 指導する, 満たす, 聞っていく, (相談に) のる, 受け止める, (代わりに) する, 癒す, 救う, 認識する, (気持ちを) 渋み取る, 察する, 向き合う, キュアする, 橋渡す, キャッチする, (変化に) 気づく, 着目する, 奉仕する, 優しくする, 共鳴する, 共感する, 教える, (安らぎを) 与える, 認識する, 与える, (話を) 聞く, 貢献する, 手当てる, (共に) 頑張る, 伝える, 解決する, (手を) 握る, 分かち合う, (心を) ほぐす, 励ます, 把握する, 捉える, 提示する, 指示する, アドバイスする, 観察する, 尽くす, 説明する	

(動詞数：81種類)

表7 看護の方法についての上位動詞の表現

順位	学部生群 n=125		学士生群 n=34	
	内 容	件数(%)	内 容	件数(%)
1	ケアする	39(31.2)	援助する	24(70.6)
2	サポート	36(28.8)	ケアする	18(52.9)
3	必要なこと を～する	34(27.2)	技術を使う	12(35.3)
4	～してあげる	34(27.2)	手伝う	9(26.5)
5	手助けする	28(22.4)	世話する	9(26.5)
6	手伝う	25(20.0)	サポート	8(23.5)
7	支える	25(20.0)	必要なこと を～する	8(23.5)
8	考える	23(18.4)	手助けする	8(23.5)
9	技術を使う	17(13.6)	支える	8(23.5)
10	援助する	16(12.8)	判断する	8(23.5)

1人平均件数：学部生3.7件、学士生5.4件

生群は、ほぼ類似の意味する内容と出現割合であった。

② 「サポートする」ことの内容

同様に「サポート」の意味する内容は、精神的サポート(25.0%)が第1位であった(表9)。その他は、「生活面・身体面」のサポートという対象の側面的なものと、「その人らしく生きられるように・自分らしく死ねるように・希望の光が見えるように」サポートするなど目的をもったものであり、17通りに分れた。学部生群と学士生群の比較は、両群とも件数が少數で分散しているため検討が困難であった。

③ 「援助する」ことの内容

「援助する」ことの意味する内容は、18通りに分かれ、「健康になれるように・その人らしい生活が送れるように・よりよい生活ができるように」援助するなど対象の目的に向かってのものと、「知的・知識を持った・技術的な」援助等と看護職側の援助要素的なものがあがっていた。学部生群と学士生群の比較は、件数が少なく各群とも分布の幅があるため困難であるが、先に示したように学士生群の7割以上が「援助する」という動詞を用いていて、その内容に「知的・知識を持った・技術的な」援助等と看護職側の援助要素的な記述が学士生群のみであることは注目しておきたい。

IV. 考 察

一般に「○○」学と学がつくものは、その学問でなければならぬ「対象」と「方法」と「目的」の明確さが必須であり、看護学においてもこのことを大事に問い合わせられていると思う。看護学を専攻した出発点である入学当初の看護学生は、何を看護の対象とし、何を方法としているかを「今、あなたが考える看護とは何でしょう」

表8 「ケアする」ことの内容

ケアの内容	学部生群	学士生群	全 体
精神的・心のケア	16(41.0)	5(28.8)	21(36.8)
身体的・肉体的ケア	7(17.9)	4(22.2)	11(19.2)
身体と心のケア	7(17.9)	3(16.7)	10(17.5)
ケアすること	1	2	3
医療活動も含めトータルケア	2	1	3
家族へのケア	1	1	2
おせっかい、気を使わせないケア	2		2
健康の維持のケア	1		1
回復できるケア	1		1
お互いに理解しながらするケア	1		1
社会的ケア		1	1
自分をケアする		1	1
計 (件 数)	39 (%)	18 (%)	57 (%)

表9 「サポートする」ことの内容

サポートの内容	学部生群	学士生群	全 体
精神的サポート	9(25.0)	2(25.0)	11(25.0)
生活面のサポート	5(13.9)		5(11.4)
身体的サポート	2	2(25.0)	4(9.1)
その人らしく生きられるようサポート	4(11.1)		4(9.1)
身体的・精神的サポート	1	2(25.0)	3(6.9)
心安らか、穏やか、楽しくなるようなサポート	3		3(6.9)
サポートする	2		2
病んでいる人が希望、喜びを持てるようサポート	2		2
健康を取り戻していく過程をサポートする	1		2
自分らしく死ねるようにサポートする	1	1	1
患者さんをサポート	1		1
患者・家族・友達をサポート	1		1
自立できるようサポート	1		1
情報提供、意見を述べるサポート	1		1
幸福に過ごせるようにサポート	1		1
希望の光が見えるようにサポート	1		1
社会的サポート		1	1
計 (件 数)	36 (%)	8 (%)	44 (%)

という設問の自由記述から分析した。

1. 入学当初の看護学生の考える看護の「対象」

看護の「対象」の記述は、9割以上の者からあり、記述表現を意味の取れる最小単位のラベルに分けると1人平均1.7件であり、内容的には34通りに分けられた。このことは、入学当初から学生は、看護の対象を考えていることが示された。そしてその「対象」の内容を「生・老・病・死」という分け方でみると、「病」に関するものが7割以上と大部分を占め、次いで「生」19.4%であ

表10 「援助する」ことの内容

援 助 の 内 容	学部生群	学士生群	全 体
健康になれるように援助	5(31.3)	3(12.5)	8(20.0)
その人らしい生活がおくれるようすに援助	5(31.3)	1	6(15.0)
知的・知識を持った援助		4(16.7)	4(10.0)
技術的な援助		4(16.7)	4(10.0)
病気の治療、回復の援助	2	1	3
心身が落ち着いた状態に過ごせるようすに援助	1	1	2
障害を持つ人への援助		2	2
人として生きられるようすに援助	1		1
精神面の援助	1		1
専門性を持つ援助	1		1
心の援助		1	1
身体の援助		1	1
病気やケガを治す援助		1	1
自立の援助		1	1
より良い生活ができるようすに援助		1	1
日常生活を満足に送れるようすに援助		1	1
適応能力への援助		1	1
援助すること		1	1
計 (件 数)	16 (%)	24 (%)	40 (%)

り、「死」と「老」については極少数のみであった。すなわち、病気の人、患者、病気に苦しんでいる人、病んで助けを必要としている人、怪我のある人、傷を負った人、病院へ通う人、入院した人など病気をもった人や病気や怪我をもって苦しんでいる人などを看護の対象と考えていることが示された。今後、人間の「形態や機能」・「健康」、人間が生まれてから老して死ぬという「人間の生涯」の知識、「疾病や治療」の知識などの看護教育を受ける中でどのように対象のとらえ方が変化していくかは興味ある追跡課題である。また、調査前には、学部生群と学士生群は明らかに高等教育である大学教育の経験の有無に違いがあり、それらの経験を含め自己のアイデンティティの発達の様相にも影響をもたらし、人間のとらえ方には両群間に異なりのあることを予想した。しかし、看護の対象については、これら両群の背景特性が関与しているとはいはず、むしろ、両群とも、看護学を学ぶという点で同じスタートにたっていると解釈できよう。

2. 入学当初の看護学生の考える看護の「方法」

看護の「方法」は、看護実践と同義語として用いてるので自由記述の中から看護実践に関する記述を抽出した。記述の抽出は、比較的たやすいことであった。しかし、次の段階である内容分析をするためには、ラベル内容からコード化し、さらに類型化していく方法にするか、あらかじめ実践（行動）の側面、例えば action/

feeling/thinking を設けて分析するなど種々のやり方を試しながら行った。それらの中で今回は、明瞭に取り出しやすく、それ自身で動作や作用、さらに判断力を有し述語となりうる動詞の表現に着目した。その結果、動詞の記述のあった者は、159/169 (94.0%) であり、1人平均動詞の数は4.0件であり、入学当初から学生は、実践の学問としての看護をとらえていることが示された。動詞の表現は、81種類と種類が多かった。共通に使われていた動詞の表現は、「ケアする」・「サポートする」・「(必要なことを) ~する」・「援助する」・「~してあげる」・「手助けする」・「手伝う」「支える」などであった。

さらに、これら共通の動詞が何を目的としているかを検討す

ると「ケアする」は、精神面、身体面、精神と身体面などの対象の側面をケアするものが多く、「サポート」では精神面、身体面・生活面の対象の側面と「その人らしく生きられるような・自分らしく死ねるように・希望の光が見えるようにサポート」など目的に向かってのサポート、そして、「援助する」は、「健康になれるように・その人らしい生活が送れるように・よりよい生活ができるように」援助するなど対象の目的に向かっての援助と「知的・知識を持った・技術的な」援助等と看護職側の援助要素的なものとそれぞれの動詞の目的語は異なり、同じ動詞であっても意味する内容が多様であることが示された。

学部生群と学士生群を比較すると動詞の表現の数は、学士生群のほうがより多く、また動詞の意味する内容面では、学士生群の方が学部生群より知識や技術を含めることが多かった。このことは、日常の講義や演習場面で学士生群に技術習得や新しい知識修得への期待が高いという印象を受けることと関係しているとも推察される。いずれにしても両群とも動詞の数とその内容がこれからどのように変化していくのかは興味ある次への課題である。

V. おわりに

「看護学」の出発点において学部生群と学士生群がど

のように看護の「対象」と「方法」を考えているのかを知ることを目的とし、1997年度と1999年度に新入生169名（学部生132人・学士生37人）を対象に質問紙法を用いて「今、あなたが考える看護とは何でしょう」の設問に対する自由記述を分析した。

その結果、①看護の「対象」は病気をもった人や病気や怪我をもって苦しんでいる人に代表される病気を中心とする者が7割以上を占めていること、②看護の「方法」は、記述の中で動詞に着目すると共通して「ケアする」「サポートする」「(必要なことを) ~する」「援助する」「~してあげる」「手助けする」などであったこと、そして、これらの動詞の目的語はさまざまであり、同じ動詞の表現であっても意味する内容は多様であることも示唆された。また、学部生群と学士生群は、看護の「対象」に関しては類似していたが、看護の「方法」については

学士群の方が1人当たりの動詞の数が多く、動詞の意味するものに技術的なことや知識への期待がこめられているとも解釈できる結果であった。

今後、看護教育を受ける中で看護の対象と方法がどのように変化していくかが次への追究課題である。

文 献

- 1) 小澤道子、香春知永、横山美樹、佐居由美：看護学生の入学当初の健康観とそれに関する要因 聖路加看護大学紀要(24), 14~20, 1998.
- 2) 小澤道子、香春知永、横山美樹、佐居由美：看護学生の考える「健康」と「元気」 聖路加看護大学紀要(25), 17~24, 1999.
- 3) Ruth F. Craven Constance J. Hirnle: Fundamentals of Nursing Lippincott 1992.

Abstract

Concept of Nursing Subject and Nursing Practice in the First-year Nursing Students

Michiko Ozawa, R.N.¹⁾, Chie Kaharu, R.N., M.N.¹⁾, Miki Yokoyama, R.N., M.N.¹⁾,
Takako Iwata, R.N.¹⁾, Nobuko Okubo, R.N., M.N.¹⁾

The purpose of this study is to know the Nursing Subjects and Nursing Practice of the first-year nursing students, because "What is Nursing" is a very important question for nursing students and all of the nurses.

In April 1997 and 1999, we conducted a questionnaire investigation on 169 first-year nursing students at the St. Luke's College of Nursing (132 undergraduate course students, and 37 graduate students transferred from another course). "What is Nursing" was asked by using the open type question.

The findings are as follows:

- 1) Some 70% students grasp the Nursing Subjects as diseased and disabled people.
 - 2) The verbs used by students in describing Nursing Practice are categorized into 81 kinds, such as, 'to take care,' 'support,' '~to do,' 'help,' 'give,' 'assist,' 'aid,' etc.
 - 3) As for Nursing Subjects, the group of the undergraduate course students and the group of graduate students transferred from another course, show similar responses, but different ones as for Nursing Practice.
- Further discussion is needed to develop student's Nursing Definition in Nursing education.

Key words

nursing-subject, nursing-practice, nursing students, freshman

- 1) St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing